シャーンタラクシタにおける“勝義に随順するもの”としての不生の意味について

李 泰 昇

1. 勝義不生の意味 インド仏教の中観思想の展開においてもっとも重要な概念と看做されてきたのが二諸説である。その二諸説の中、勝義の真理を明らかにするためによく言われているものが勝義不生の概念である。勝義不生とは、勝義の真理の立場から見れば生ずることがないということで、ここにおいては世俗というものが虚妄であること、即ち虚妄法であるという意味が含まれている。従って勝義不生には、勝義においては世俗の虚妄法のようなものが生じないという意味が含まれている。ここにおける虚妄というのは、われわれにとって真実である空などの概念をもたらすことを障碍するものとして顛倒性であり、それによって見られる世界のことをいう。従ってそのような頼倒されている意識世界から離れ、空・無常の世界すなわち勝義の真理を見る世界を意味して勝義不生ということばを使っていると思われる。このような勝義の概念は、ナーガールジュナ以降にも受け継がれ、長い間、インド仏教思想家たちもそのような意味として受け止めていたと思われる。しかし勝義の概念はインド仏教者の間でしばしば論議を起こさせ、もっと深く、多様な意味が加えられることになる。それでその勝義に関する多様な概念の中、より深く考えるべきものが、後の中観思想家の中に見える“勝義に随順するもの”の概念である。

本稿では、その“勝義に随順するもの”の概念が重要視されている後期中観派の中、さらに後代重要な思想家として看做されるシャーンタラクシタのそれについての理解とシャーンタラクシタに影響を与えたと思われるジュニャーナガルバの解釈を調べ、その意味をよりはっきりさせたい。

2. 勝義に随順するもの ナーガールジュナ以降、二諸説に関して多様な意見が出ているが、その中、後期中観派であるシャーンタラクシタは MAV の中で、勝義不生の概念と関連して“勝義に随順するもの”の概念を使っている。この“勝義に随順するもの”とは“勝義そのもの”ではなく、勝義を表すものあるいは勝義に似ているもの等の意味である。彼は次のように言う。

—923—
シャーンタラクシタにおける“勝義に随順するもの”としての不生の意味について（李） (137)

(K.69) それ故に、真実においてはいかなるものも成立することのないから、如来達は諸法は不生といわれたのである。
(K.70) 勝義に随順するから、それは勝義といわれる。真実においては「それ」は一切の観論の集まりを離れている。


(K.71) 生起などがないから不生などもありえない。その本性が否定されるから、それを表す言葉もありえない。
(K.72) [否定の] 対象がないのに否定を適用することは正しくない。分別によるなら、[不生は] 世俗であり、真実ではない。

ここにおいてシャーンタラクシタは、“勝義そのもの”についてそれを表現する言葉さえもありえないとして、生起は勿論不生も表現できないとしている。それであえて分別によれば、不生は世俗であり、勝義ではないと言うのである。ここにおいて不生が世俗であるというのはもっとも重要である。それはシャーンタラクシタが MAV を著述する時、彼の先輩であるジュニャーナガルバの影響を受けたことを確実に示していると思われるからである。すなわち、この勝義不生の概念をめぐっては、シャーンタラクシタは SDP において、不生の概念とは勝義ではなく、世俗を表す概念であることをしばしば述べている。周知のように SDP とは、シャーンタラクシタの先輩に当たるジュニャーナガルバの SDV に対する注釈である。シャーンタラクシタがジュニャーナガルバのものを注釈したことか

— 922 —
ら、ジュニアーガルバの考え方がシャーンタラクシタに影響を与えたことは推測可能である。とくに不生の概念に関しては、ジュニアーガルバの思想的影響がより強く感じられる。なぜならSDPにおいては不生の概念だけでなく、正理即ち論理式を使った勝義の表現も実際には勝義ではなく世俗であるという概念がよく出てくる。それでも正理を重視したバーヴィヴェーカからの影響であると考えられるが、その正理の意味がシャーンタラクシタのMAVにおいて相当重要であることを念頭におけば、ジュニアーガルバのシャーンタラクシタに対する影響はさらに強かったと思われる。

3. 『二識分別論細疏』における不生 シャーンタラクシタのSDPはジュニアーガルバのSDVの注釈であるから、SDPの記述は当然SDVの内容に沿ってその考え方が示されている。SDVの中の不生に関する部分についてのSDPの記述を見ることにする。

まず、不生の概念が“勝義に随順するもの”であることを明快に示すものとしてSDPは次のように注釈している。

[SDP] 他の人が真実の世俗であるということを示すから、“も”といったのである。
なぜそうであるかというと、即ち（K.9A）生起などの否定も。
勝義であると我々は主張する、というのが従う、なぜかというと、
（K.9B）真実に随順するからといったのである。
どうして真実に随順するかというと、真実としての生起など分別性の否定という証因によって、といったのである。他の人々の瑜伽行派によっては、生起などの否定は、ただ真実である勝義として把握されるからである。“も”というのは内包の意味である。正理論者はなぜそのように主張しないかというと、生起などの否定はただ世俗であるからである、なぜかというと、正理で考察すれば、いったのである。[(D.No.3883, 24b: P. No.5283,13b)] なぜ、ただ世俗であるかというと（K.9CD）否定されるものがないから、真実には否定もないのが明確であるといったのである。それを解説するか、否定対象がないなら否定は生じないから、といったのである。なぜ否定対象がないなら否定が働かないかというと、対象がない否定は不合理であるから、といったのである。（下線SDV）

ここでは不生の概念は“真実に随順するもの”としての意味を持っており、そしてその不生の概念を、ただ真実の意味として受け止めているのは瑜伽行派であると言っている。さらに“真実に随順するもの”の意味とは世俗であり、そしてそれは正理で考察される意味であると言っている。ここにおいてシャーンタラクシ

－921－
この記述には瑜伽行派についての敵意が感じられる。その瑜伽行派の間違った立場については次のような記述からも窺われる。すなわち、

［SDP］他者のもの、すなわち瑜伽行派において勝義として安立する生起などの否定は、他のもの、すなわち中観派において世俗である。（下線 SDV）（D.No.3883, 37b: P.No.5283, 30a）

というように、不生の概念を勝義として認めると瑜伽行派に対して中観派は世俗とし受け止めている。世間としての不生の意味について、シャーンタラクシタはジュニーナガルバの考え方にによって、正理によるものであると言ってい。すなわち SDP は次のように注釈している。

［SDP］このように敵者達によって、諸物事は勝義において生起するということについて、中観派は、諸物事が勝義において生起するといったことについてそうではない、ただし否定することを説明する。（D.No.3883,36a: P.No.5283,28a）

（K.16BC）この言説の意味は正理によるなら不生であるというのが、それを示すことである。この言説の意味とは、勝義において不生であるという意味である。

（K.16D）他の場合においても、そのように適用しなさい。

というのは、理解しやすいことである。

このように世俗としての不生の概念とは、正理による考察の対象であることを意味している。そして K.16D において語られる “他の場合” というのは、例えば “真実において無である” とか、また “真実において空である” といった場合のことで、それも正理に従えば無である” “正理に従えば空である” という意味である。すなわち、世俗のものなら正理の範囲を離れることはできないとの意味である。この正理は、MAV は勿論 SDV の中でも重要な概念であるが、SDP でもそれについて次のように言っている。

［SDP］なぜ、そのように、その正理も現現する通りにおいてすべて安立するかというと、それ故に、経典より、世間の世俗とは別の勝義はないと説かれているのである。それは正理であるからである [P.本に従う] なぜその二つが別ものではないかというと、即ち世間世俗の如実性であるのは、現現する通りのものであるという意味である。それは勝義の如実性でもある。なぜなら、正理も現現する通りの世俗において安立するからである。（D.No.3883,37a: P.No.5283, 29b）

ここでも正理は “現現するとおりの性質” のものを対象としており、そしてそれによる世間の世俗の如実性は勝義の如実性とも通じるといっている。即ち不生の概念とは正理を避けられない世俗のものであっても、勝義に通じる意味を持っていから、その意味で、“勝義に随順するもの”になるのである。

— 920 —
4. まとめ MAVにおいてシャーンタラクシタは、不生に関して“勝義に随順するもの”と勝義それ自体を区別している。勿論“勝義に随順するもの”についてはパーヴィヴェーカのものを引用して語っている。しかしシャーンタラクシタはSDPにおいて、ジュニャーナガルバの思想を注釈しながら、“勝義に随順するもの”の概念に強く影響を受けたと思われる。即ち勝義、言い換えれば真実を表すものとしての不生の概念について、シャーンタラクシタはそれを先輩であるジュニャーナガルバの説にしたがって正理としての不生の概念のこととして受け止めたと思われる。この意味において勝義の不生とは、正理に従って見れば不生であることをいい、さらに不生とは正理としてみれば生起と相対的な面を持っていていることもある。そのような相対的な概念は、他の観点から言えば分野によるものでもありうるが、それは世俗のことを性質としているので世俗ともいえる。そしてそのような世俗のことをすべて離れた境界が勝義であることはいうまでもない。シャーンタラクシタの考え方によれば、その正理として主張しているすべてのものは実際には勝義そのものではなく、勝義を表すもの即ち真実を表すものとしての役割を果している。これを言い換えれば、真実を表す誠なる役割をするものが正理であり、その正理の役割として論証すべきものが、不生の概念および無自性の概念などであったと思われる。特に不生の概念は伝統的に勝義を指す重要な概念であったが、シャーンタラクシタはジュニャーナガルバの影響で、その概念が“勝義に随順するもの”であっても、その性質は世俗であることを明確にしたと思われる。

(使用テキストと参考文献)
MAV [中観莊厳論]：Madhyamakalâmakarâvṛtti [M.Ichigo 本 (BUNIEDO, 1985) 参照]。
SDV [二諦分別論]：Satyadvayavibhaṅga-vṛtti (D.No.3882)。
SDP [二諦分別論細疏]：Satyadvayavibhaṅga-panjikā (D.No.3883: P.No.5283)。
[SDV・SDPの翻訳とチベット文は、筆者の学位論文による。駒澤大学 1993年度博士論文『二諦分別論細疏』の研究』所収。その学位論文と関連して筆者は最近韓国で『シャーンタラクシタの中觀思想 (韓国語)』 (仏教時代社, 2012) を出版した。]
江島 (2003)：江島慧教『空と中観』春秋社。

(キーワード) チャーンタラクシタ，ジュニャーナガルバ，勝義，勝義に随順するもの，勝義不生，不生，正理

（咸德大学校副教授）